

最期まで尊厳守る医療

今月20日午後。新潟市中央区の内科医、斎藤忠雄さん(56)は、助手席に看護師を乗せて自ら車を運転し、市内の一軒家に向かった。患者は、3年前に脳幹出血を起こし四肢まひになった70歳代の男性。目をのぞき込み、「おじょうさんはお正月に来るの」と語りかける。男性は動かせる目玉を上下させて「うん」と合図した。

1994年に内科医院を開業したが、高齢の患者が増えた。2006年からは、外来は午前中だけとし、午後を訪問診療に当てている。患者の人間としての

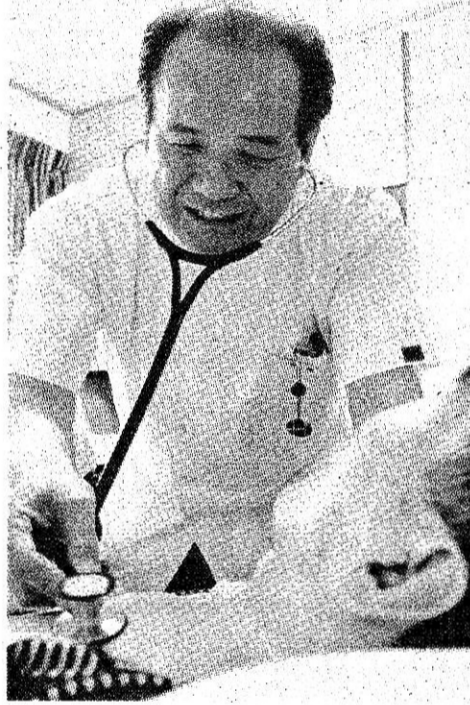
尊厳を大切にし、同じ目線で医療を施したい。そう考えたからだ。

「自分で選び、考え、人から愛される、そんな人としての尊厳を、患者から奪ってはならない」。08年9月、麻薬の使用免許を取り、本格的に始めた、在宅での終末期医療「みとりびと」の活動も、その思いが源泉となった。

志をともしにする医師や看護師、介護士らと「みとりびとチーム」を結成。協力

して、末期がんなどの患者宅を訪問している。診察や、痛みを和らげる麻薬の投与を行いながら、患者が普段通りの生活を続け、大勢の家族に見守られながら旅立てるように心を砕く。

最初にみとったのは、末期がんに侵された44歳の女性だっ



た。「どうやって死後の世界に行くの。怖い」。か細い手をさすりながら「大丈夫。痛みなく安心していけるようにしますよ」とほほ笑みかけた。女性は亡くなる直前まで、当時中学生の一人息子に食事を作り、家族と3匹の愛犬に囲まれ、最期を迎えた。穏やかな表情だった。

斎藤医師はもともと大病院で、肝臓を専門に研究していた。業績が認められ、36歳で米国の大学から客員助教授に招聘。しかし、先輩を追い越して留学したことがきっかけで周囲との摩擦を生み、2年後に帰国したと

きには、大学に自分の居場所はなくなっていた。

思いがけず飛び込むことになった、地域医療の現場。患者の人間としての尊厳が、保たれていないと感じた。「幼児扱いは嫌だ」と介護施設への不満を聞いたのをきっかけに、07年、医院の敷地内に自前の介護施設を開設した。高齢者や末期がんの患者の生活を24時間体制で支え、休日、夜中でも電話を受け、講演の依頼があれば全国を飛び回る。激務だが、「この仕事は天命」と感じている。

「施設を核に、近年増えている空き家を利用して、高齢者が共同生活する仕組みを作るのが、夢。地域を陰から支えるのが、医師の役目です」

(小森有希子)

ひだまり

⑥